

# 『両宮本誓理趣摩訶衍』考

——中世神道論書研究（一）——

一 はじめに

門 屋 温

鎌倉・室町期には夥しい数の神道論書が著され、そこでは様々な言説が紡ぎだされ、神祇信仰は急速にその教理的な体裁を整えていった。しかし、江戸中期以降その多くが「（神道・仏教）両部習合の書」として排斥されてからは、これらの神道論書は、ごく一部を除いて、至極冷淡な扱いしか受けてこなかったといつてよからう。近代においても、その状況は大きく変わったとは言えず、宮地直一・西田長男・久保田収といった斯界の泰斗が、「神道史」全体の見取り図を構築するうえで言及されて以後、個別の研究は決して進んだとは言えないのが現状であろう。もちろんこれには史料的な制約もあずかっているのであるが、近年、歴史学や文学のフィールドからのこの分野へのアプローチも目立つようになり、それらの成果は当然宗教・思想研究の側からの、中世神道論書への本格的な取り組みを促しているのである。

さて、ひとくちに中世の神道論書といっても、その範囲は多岐にわたり、かつその相互の関連は複雑である。そのことが研究を困難にしてきたとも言えるのであるが、中でも比較的まとまりの良い山王神道・吉田神道などについては、近年本格的な研究が着手されている。それに比してその内容が複雑かつ広範に及ぶため、もつとも研究が遅れているのが、いわゆる「両部神道」（真言神道）の分野であり、まとまった史料のある三輪流神道を除

けば、いまだ手付かずの状態にあるといつてもよい。が、「両部神道」には『天地麗気記』や『鼻帰書』をはじめとして、問題とすべき神道論書は多い。そこで、小稿ではまず手始めとして、従来あまり注目されることなかった『両宮本誓理趣摩訶衍』なる書に光を当て、考察をめぐらせてみたい。

## 二 『両宮本誓理趣摩訶衍』の成立

『両宮本誓理趣摩訶衍』（以下『理趣摩訶衍』と呼ぶ）は、『天地麗気記』などと同様、空海に仮託されている。もちろん、本文中に「大師の曰く」という文言があることからわかるように偽撰である。現在『弘法大師全集』巻五に収められているが、中世から近世までの各種『弘法大師著作目録』には載せられていないところからみて、真言宗教団内部では、一貫して偽書とみなされていたと考えてよからう。また、その記述があまり仏教的であるせいか、度会神道や吉田神道の諸論書に引かれることが全くといっていいほどなかった。そのため、従来正面から取り上げられたことはほとんどない。そのなかで、いち早く言及されたのは、大山公淳氏であった。<sup>(1)</sup>しかし、当時はまだ「弘法大師全集」には題目のみで本文が載せられていなかったこともあり、金剛三昧院本にふれて、「天地麗気記の論法を承」けて「（天照大神）両宮秘決と前後して作られたものであらう」と、述べられては過ぎない。ついで久保田収氏は、<sup>(2)</sup>『鼻帰書』の成立について論じられた中で、『鼻帰書』と『理趣摩訶衍』の関係についてごく簡単にふれられた。<sup>(3)</sup>そして近年、福田亮成氏が、『理趣摩訶衍』そのものの内容について、嚆矢ともいふべき発表をされたのが、管見に入った研究のすべてである。したがって、この本についてはまだほとんど何もわかっていないといつてもよい。しかし、久保田収氏が注目されたように、『鼻帰書』をはじめとする真言系の神道書の成立と伝授の過程を考えるうえで、欠かすことのできぬ書であるように思われるのである。

ところで『理趣摩訶衍』の伝本については、現在『弘法大師全集』所収のものを含め、六本の存在を知ることができる。<sup>(4)</sup>それを、つぎにあげておこう。

A 高野山大学図書館蔵 金剛三昧院寄託本

B 大倉精神文化研究所蔵本 (上中下三巻)

C 宮内庁書陵部蔵本 (下巻のみ)

D 京都大学附属図書館蔵本 (下巻のみ)

E 高山寺蔵本 (下巻のみ)

F 「弘法大師全集」巻五 所収本(底本 京都府京極 長福寺蔵本)

Aは現在所在不明のようであるが、大山公淳氏によれば、表題に「両宮本誓理趣摩訶衍上下」とあり、宝徳三年(一四五一)および長享二年(一四八八)の書写奥書をもつものである。

Bは江戸末期のものと思われる写本であるが、奥書の類はいっさいない。ただ「弘法大師全集」所収本(以下「全集本」と呼ぶ)で欠字となっている部分がそっくり欠けており、さらに真言を表わす種子の部分が空白になっているところから、「全集本」底本の転写本とみられる。

C・D・Eはいずれも、十数巻からなる「麗氣記」の後に下巻のみが付されたもので、こうした伝授形態であったことをうかがわせる。DとEに併せて蔵される『神天上地下次第』には、「建久二年(一一九一)三月六日書写畢。本奥云。祭主永頼玄孫蘭城寺住僧證禪。へ中略。此秘書者当家相伝文也。依有兩本於一本者為衆生利益奉授之狀如件。乾元二年(一一三〇)正月十二日称宜度会神主行忠」という奥書がある。ここにみえる「證禪」なる僧は、櫛田良洪<sup>(5)</sup>・久保田収<sup>(6)</sup>・岡田莊司<sup>(7)</sup>各氏が指摘された、版本および無窮会神習文庫蔵の『中臣祓訓解』や金沢文庫蔵『宝志儀軌相伝事』(宝志和尚伝)の奥書にみえる「證禪」と同一人物であると思われる。とすれば、鎌倉期初頭にこれらの両部神道書がかなりまとまった形で園城寺の證禪の手を経由し、それが外宮神官度会家へ

と流れこんだと考えられる。ただ、この奥書は『神天上地下次第』に付されたものであるので、『理趣摩訶衍』下巻がいつどこで付け加えられたのかは、ここからは明らかにしたい。

Fの「弘法大師全集」所収本の底本となった京都府葛野郡京極村長福寺蔵本も現在その所在は不明である。

されば、『理趣摩訶衍』はいづごろ成立したかということになるが、さきにも述べたように他書へ引用されることがあまりなかったため、その下限を定めることは容易ではない。書名としては、高野山宝亀院蔵の永正十六年（一五一九）有尊筆『神道御書目録』に「『理趣摩訶衍』上下」と載せる。また本文の引用としては、南北朝成立と思われる『神代秘決』<sup>(8)</sup>巻第一「天照大神品第二」に、「両宮本誓摩訶理趣云」として、伊弉諾伊弉冉二神が天御中至尊さらには内外両宮へと変化したという説を引くほか、貞和四年（一三四八）写の神宮文庫蔵『類聚神祇本源』<sup>(10)</sup>神鏡篇の端書に「摩訶衍」として、内外両宮の御正体である靈鏡に関する秘決を載せるくらいが、管見に入ったところである。いづれも成立年代を絞りこむには程遠い材料といわねばならない。あとは『鼻掃書』とその類書とされる『天照大神口決』との関係が問題となるが、それについては後で詳述することとする。

### 三、『理趣経』との関係

さて本書の成立についてはひとまず措いて、その内容について考えてみることにしよう。『理趣摩訶衍』の内容は、ひとことでは言え、その表題にあるように、「伊勢内外両宮の本誓を理趣経の大乗の教えによって説いたもの」ということになる。それでは具体的にどのようなように説かれているのか、見てゆくことにしよう。なお本文は原則として「弘法大師全集」所収本によるものとする。

まず巻頭は、両宮鎮座の諸神・権実の護法の諸衆に敬白する形で始まる。ついで、「それ天地開闢の初め、神宝日出の時、御饌都神と尸棄光天女と同時に契を成し永く天下を治む。言寿宜して、肆に或るは月と為り日と為

りて、永く大空に懸かりて落ちず」と、『倭姫命世記』冒頭とほぼ同一の文が引かれる。ただし、御饌都神と契約を結ぶのが『倭姫命世記』では大日靈貴であるのが、ここでは尸棄光天女になつてゐる。これと同様の表現は『中臣祓訓解』や『天地麗氣記』にもみえるが、以下『理趣摩訶衍』の本文は『天地麗氣記』の該当部分に概ねしたがつて、両宮正殿を自性三昧耶の大梵宮殿であると説く。そしてさらにそれに付け加えて、この宮殿の中にある「心の御柱」は、金剛界遍照如来の法身の三昧耶形であるがゆえに、「独胎金剛」とも言うゝと述べる。また、経津主命・健甕命両神は大廟の御前を守る金剛力士であり、八坂瓊曲玉・八咫鏡・草薙劔の三種の神財については、普門法界大日輪の実（宝カ）鏡や独一法身嚩日羅（バサラ）の宝玉であるとする。また、大毘盧遮那如来は大日靈貴と變じて両宮の太神と下生し、天上にあつては「天王如来」、地下にあつては「皇太神」といふとある。経津主命・健甕命両神および三種の神財についてここで触れるのは、おそらく『倭姫命世記』の次第に従つてゐると思われるが、その教説はむしろ一連の「麗氣記」類に近いものである。

続いて、箇条書きで神号と両宮の靈鏡について述べる。まず神号については、天上では天照大神地下では天御中主尊と呼び、火珠・水珠所成神、日天子・月天子、豊受皇太神・天照皇太神、大元神・虚無神はいずれも大毘盧遮那如来の變化であり、内外両宮が両部の大日であることはあきらかであるとする。注目されるのは、豊受皇太神に「皇」の字が冠せられ、なおかつ天照皇太神よりも前に出されていることであろう。ここには『皇字沙汰文』で論争の的となつた、内外両宮同格さらに外宮優位の姿勢が窺えるのである。ついで靈鏡については、内宮が八葉の蓮華形で径八寸、裏には「七寸の天女の像」が描かれてあり、外宮は月輪円形で同じく径八寸、中に五つの円輪が配され裏には「男天の像」が描かれてあるという。これもおおむね「麗氣記」の『天照太神宮鎮座次第』『豊受皇太神宮鎮座次第』等にも見える秘説であるが、それぞれ裏に描かれるという男女天の像——『理趣摩訶衍』によれば「梵天帝釈二天王」——については、寡聞にして他書に引かれてゐるのを知らない。

このように、『理趣摩訶衍』にはあきらかに『倭姫命世記』『中臣祓訓解』『天地麗氣記』などといった先行

神道論書の影響が見られるのであるが、直接引用したり参考にしたりしたと思われる箇所は、巻頭のこの部分に集中している。これはおそらく、本書の序にあたる部分を書くにあたって、総論的なことを述べるために他の神道論書を参考にしたのであろう。

以下本文は降臨供奉の三十二神について述べた後、七言・五言・四言長短様々の偈頌十二首を掲げる。そのうち十一首は一回づつ、最後の四言二十八句のものだけは十回唱える。そして、『大毘盧遮那成仏神変加持經』の修行は「世界悉檀有情非情正覚正智の法門」であるとして、『大楽金剛不空真実三摩耶經般若波羅密多理趣品』すなわち『理趣經』を説く、と本説に入るのである。

ここから、『理趣經』本文の引用が始まる。まず最初に序説と第一段が引かれている。『理趣經』第一段は、妙適・慾箭・愛縛・一切自在主・見・適悦・愛慢・莊嚴・意滋沢・光明・身楽・色・声・香・味の十七の清淨句について説く。すなわちこれら一々の清淨を説くことにより、一切法が自性清淨であることを説くものである。

『理趣經』原文では各々の清淨句について「妙適清淨句是菩薩位、慾箭清淨句是菩薩位」と、一々その清淨を明かすが、『理趣摩訶衍』は「妙適・慾箭・愛縛……以下十七清淨を羅列した後、ひとまとめに「是くの如き清淨句は是菩薩の位なり」と述べて、それをさらに『理趣經』の解釈にしたがつて金剛薩埵の真言に当てている。

それは「オン・マ・カ・ソ・ギヤ・バ・ザラ・サ・トバ・ジャク・ウン・バン・コク・ソ・ラ・タ・サトバム」の十七言からなり、『理趣經』や『金剛王菩薩秘密念誦儀軌』<sup>(13)</sup>においては『理趣經』十七尊曼荼羅の十七菩薩の種子に配当される。この真言のことを『理趣摩訶衍』は「秘密の神呪」と呼ぶのである。

『理趣摩訶衍』では『理趣經』について、まず「この經の大意は、三世の諸仏独一法身の三摩耶を宗となす。その三摩耶とは金剛加持独結なり。独結とは一切衆生の無明煩惱の幢なり。幢とは正覚正知根本の名なり」と述べる。それから『理趣經』の構成を説明するが、「其の大經に十七段あり」と『理趣經』をもちいるように見えて、その実、序説を「五仏の名詮自性を説く」として三段分に配当し、残りを十四段に分けるといふ『理趣經』

とはあきらかに異なつた解釈をしている。その理由は、この解釈が不空訳の『理趣經』ではなく、玄奘訳の『大般若經般若理趣分』<sup>(14)</sup>いわゆる『理趣分』に基づいているからである。『理趣分』にしたがつて述べる十四の法門の内、『理趣摩訶衍』では第九の法門が抜け落ちてゐるが、実は『理趣摩訶衍』で第八に挙げられているのが『理趣分』第九の法門であり、作者は『理趣分』第八の法門をうっかり見落としたために、数が合わなくなつてしまつたものと思われる。そしてここでも最終第十四段（『理趣經』の第十七段にあたる）の「大日遍照の相によりて、如来秘密法性大楽金剛不空神呪の法門を説く」という文を引き、この「神呪」とは不二不思議の法であり、金剛界大日の印である「智拳印」を結び、胎藏界大日の明である「アーク」を唱えるのもまた不二の深義であると強調するのである。

『理趣經』第二段以降の引用は（以下段数は全十七段とする『理趣經』の分け方にしたがう）、『理趣摩訶衍』下巻の後半部分を占めている。ここで、注意されるのは第三段部分で、「降魔調伏の釈迦は秘によるが故にこれを略す。印明これを出す。ヘウン・降三世の印」心は上巻に載す」とだけ述べて、この段のみ原文の引用が省略されている点である。「心は上巻に載す」とあるので、上巻を見るとその中程にそれと思われる部分があるが、なぜかこの段のみ不空訳ではなく、玄奘訳の『理趣分』が引かれているのである。その理由については、さきの十四法門の採用と関係しているかとも思われるが、筆者にはよくわからないので、どなたかのご教示を請うものである。また、この第二段以降の引用をよく見ると、『理趣經』原文では各段とも理趣を説いた後に真言を記して終わるが、『理趣摩訶衍』はその真言について補足の説明が付いている点に特徴がある。多少煩わしいが、その部分のみ抜き出して掲げてみることにしよう。

② 智拳印ヘアーク、亦ヘバ・サ・ラ・ダト・バン・アーク、

③ ヘア、次に降魔調伏の釈迦は秘によるが故にこれを略す。印明これを出す。ヘウン・降三世の印、

④ ヘキリーク、この印明は一切衆生色心平等なること自証大悲八葉の肉段のごとし。法界開敷蓮華なり。三

密の鏡に善惡の妄塵を浮ぶ。如来加持の印明護持するが故に。

⑤ヘタラン∠この印明は宝部平等の印明なり。滅惡趣の印明は修行菩提不二なり。修行菩提不二とは修行の仏は定によりて成仏す。故に不二なり。

⑥大三摩耶印ヘ阿克∠この印明は如来の三身なり。衆生の身口意平等無礙蘇悉地至極の印明なり。蘇悉地とは衆生悉く仏位に歸する印明なり。また仏心と衆生心と悉く一心不二なるが故に、普賢菩薩の色心三昧の印この加持によるが故に、一切衆生無明住地の雲晴れて『理趣摩訶衍』を成す。

⑦ヘアン∠この印は如来秘密の劔印なり。または梵篋三摩地の印と名づく。または忿怒三摩地の印と名づく。この加持によるが故に、身の八不八万四千の煩惱を摧破す。

⑧外五胝印ヘウン∠この印は如来秘密一大法界五胝の印。この印を結ぶによるが故に、凡身すなわち仏なり。この理を顯わす。

⑨内五胝印ヘオン∠この印は三世諸仏の内證秘談不二満足の印なり。字は虚空庫菩薩の一字心の種子なり。是をもつて毘盧遮那の種子となす。この経は無辺法界の諸仏の種子となる。また一切衆生の事業の三摩地なり。

⑩ヘカク∠印は一切如来の金剛不壞の印。三惡業能断の金剛牙の印なり。明は法界円明法界無明能断の明なり。

⑪ヘウーン∠印明は三界建立の印。無余一切有情界常住不變の印なり。種子は三身解脱の字、生死即涅槃の字なり。

⑫ヘタラ∠羯磨の印明を説くは、森羅万象威儀事業の印明なり。明とは天地和合の明なり。

⑬ヘビヨク∠印明は本覺菩提の印、明は自性三摩耶真実心なり。

⑭ヘサバ∠字印とは法界身量の印、明とは大成就の明なり。



⑮ヘガンノ字印とは本地法身般若の印、明とは三密四曼の明なり。

⑯是くのごとし。この故に印明を説かず。秘密の故に面授口決の大事なり。

⑰この印明は阿闍梨位の印明なり。

これらを通覧するに、『理趣摩訶衍』の関心は『理趣經』の教理そのものよりも、その印と明にあるように思われる。さきの十七言の真言の場合も、『理趣經』のように曼荼羅上の十七尊に当てることよりも、「秘密の神呪」であることが強調されていたが、ここでもこれら印明の加持力によって「無明の雲が晴れて『理趣摩訶衍』が成り」（第六段）、「八万四千の煩惱を摧破する」（第七段）ことに力点が置かれる。つまり、上巻にも記されるように、「般若理趣の教えによって、貪欲・瞋恚・愚癡・疑・惡見・憍慢といった煩惱も本来菩提と平等であり、そのままに清淨であることを証する」という『理趣經』の經意を、印と明とに凝集せんとするものである。それは上巻はじめの偈頌の中に「白衆等各念 此時清淨偈 諸法如影像 清淨無仮穢 取説不可得 皆從因業生」という『金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如来自受用身内証智眷属法身具名仏最上乘秘密三摩地礼懺文』<sup>(15)</sup>の偈が、また下巻前半部に『般若心經』の「これ大神呪なり、これ大明呪なり、これ無上呪なり、これ無等等呪なり、よく一切苦を除く」という句が引かれていることから、裏付けられるであろう。

さて、残る下巻前半部分は『大日經疏』や『菩提心論』からの引用によって大半が占められている。このふたつは空海によつて重く用いられ、ことに『理趣經』の解釈においては、この両書の「十六大菩薩生」理解が軸になっているといわれる。『理趣摩訶衍』においても、たとえば第六段を引用して（前頁⑥参照）、「金剛拳大三摩耶の印」を「無礙蘇悉地至極の印<sup>(16)</sup>」とするがごときは、金剛拳菩薩が十六大菩薩生の最後に位置することになると思われる。がしかし、『理趣摩訶衍』自体には、むしろそうした要素は薄いといえる。たとえば『理趣經』第一段の引用に際しても、段末の「一切法に於いて皆自在を得」の後、原文では「無量の適悦歡喜を受け、十六大菩薩生を以て如来及び執金剛の位を獲得す」という句が、「十六大菩薩は各々一味平等にして行願成就せり」

と変えられている。おそらく両宮の本誓を語るに、成仏論につながる「十六大菩薩生」は必要なく、般若理趣も一切法自在を得るところまで充分と考えられたのではないか。したがって『大日経疏』の引用も巻第一の『大智度論』の引文を含む部分が中心となり、「加持処たる広大金剛法界宮中に伐折羅（金剛杵）をもつ伐折羅陀羅（執金剛）がある」ことに焦点が絞られる。この引用の前後の地の文を見るに、「両宮の王殿法界宮なり」「心御柱は独怱囀日羅なり」とあつて、『大日経疏』の引用に基づき、両宮正殿を法界宮、心御柱を独怱金剛杵と置くことによつて、伊勢内外両宮を大日如來の神變加持の道場と観想しているのである。これはすでに『理趣摩訶衍』冒頭、『天地麗氣記』の文に続いて語られていたことでもあつた。

以上見てきたことを簡略にまとめると、次のようになろう。

- ① 両宮正殿が法界宮、心御柱が独怱金剛杵であるこの伊勢内外両宮は、大日如來の説会の場合に他ならない。
- ② そこで説かれる般若理趣の教えにしたがつて、世界が本来清浄であることを知れば、一切の願いは成就する。
- ③ この教えは『理趣経』中の印と明とに象徴されており、それが凝集されたものが十七言の真言である。

#### 四 『鼻帛書』および『天照太神口決』との関係

『理趣摩訶衍』は上中下三巻からなるが、前節で扱った内容は上下両巻に跨がるものであつた。というのは、中巻のみはその様態を大きく異にしているからである。すなわち、中巻は十五種の不可思議な図とそれに付された短い注釈からなっているのである。まるで判じ物のようなこれらの図の一例が意味するところは、行基作と記されたその注釈からある程度窺えるが、これらの図の総体が何を意味するのかは判然としない。このわかりにくさの理由のひとつに、これらの図と上下巻の内容との間にはつきりとしたつながりが感じられないことがある。さきに見てきた上下巻の内容には、図の存在を暗示するような記述はまったくなかった。一方中巻の方にも、上

下巻に展開される理論と直接結び付くような表現はないといつてよい。この中巻と上下巻との有機的関連の薄さは、『理趣摩訶衍』は上下巻のみが先になり、後から中巻が差し挟まれたのではないかという疑念を筆者に抱かせるのである。第二節でふれた高野山宝亀院蔵の永正十六年（一五一九）『神道圖書目録』には、『理趣摩訶衍』上下と載せられていたことも、そう考えると、かつては上下二巻の伝本が存在した可能性を想定させるものと言えよう。

ところでこの『理趣摩訶衍』中巻は、『鼻婦書』および『天照太神口決』との密接な関係が従来指摘されている。高野山大学図書館所蔵の正祐寺寄託本『鼻婦書』<sup>(17)</sup>は、天保六年（一八三五）大阪活魂社真蔵院の量観の書写にかかるものであるが、その奥書に量観は「此の書ならびに理趣摩訶衍・無題記の三書、高野山清浄院において殊に秘すの旨、彼の院蔵版南山殊勝記に見ゆ。然りと雖も各別の書に非ざるか、麗氣記等の文義相似たり」という識語を記している。『無題記』は『天照太神口決』の別名とされ、この三書を一組のものとして扱う見方があったことは確かなようである。

『天照太神口決』<sup>(18)</sup>は『天照太神両宮秘決』あるいは『無題記』ともいい、近年伊藤正義氏・阿部泰郎氏<sup>(19)</sup>らによって即位法をめぐる史料として注目されてより、脚光を浴びるようになった書である。その内容については両氏の論考にゆずるとして、ここで問題になるのは本書中の「差図の口決」なる部分である。そこには八咫鏡・八坂瓊曲玉・劔をはじめとする十五の図形についての口決のみが記されているが、その内容は『理趣摩訶衍』中巻の十五種の図と符合する。そしてこの口決の終わりには次のように記されているのである。

此等の図をば前の二図を除きて銀を以てこれを造る。西宝殿東宝殿の内にこれを構えたり。代々の王のたてまつる鏡をば秘蔵してこれを取置く。日記これあり。故に此等の図形は無始より大和姫の皇女造り給へる。神体なる故に何と云える日記なし。故にこれを秘蔵せず。打摧き破れ折れたり。委しくは別の日記にあり。これを伝えたてまつる。以上指図の口決畢んぬ。

此の口決の巻は大師の理趣摩訶衍という三巻の文の中巻なり。此れ肝心なる故に能く能くこれを秘すべし。すなわち『天照太神口決』のこの部分は、あきらかに『理趣摩訶衍』中巻をもとに書かれているのである。『天照太神口決』の成立は、その伝本のいくつか「嘉暦二年（一三二七）三月五日」の本奥書を持つところから、鎌倉末に比定されている。とすれば、それ以前に『理趣摩訶衍』は上中下三巻の形で存在していなければならぬことになる。

ところで、この『理趣摩訶衍』中巻の図形については、嘉暦二年よりさらに数年早い正中元年（一三二四）成立とされる『鼻帰書』にも、それと思われる記述がある。『鼻帰書』は伊勢内外両宮の神を教内教外の二義に分かつて説き明かそうとするもので、それぞれ教内に五義、教外に八義の項目をあげて釈している。その教外の第三「殿舎の造意を明かす」項に、千木・堅魚木などのを表するところを説いた後、「方形半月形三角形円形宝形の五つの図形と「石・水・草・木」の図についてその意を述べる<sup>(20)</sup>。その内容は『理趣摩訶衍』の一五種の図のうちの九種と符合している。さらに『鼻帰書』は残りの図形についても、「此の余の図、銘のごとし、これを見るべし。知りやすし」と、『理趣摩訶衍』の図に付された注釈を念頭に置いていられると思われる言い方をしているのである。『鼻帰書』中には直接『理趣摩訶衍』の名は見えないが、この部分の直前にこれらの図をめぐる言説が収められるに至った経緯が記されている。やや長くなるが、引いてみよう。

此の絵図相伝の不思議を明かさば、此の絵図は天子の文庫の中に致載すと云う太神の重宝なり。是をまた銀を東西の宝殿に納められたり。時代何切とも日記無き故に人これを知らず。時に代々の長官是をかかる神宝もあるやとて四方に投げ置きて賤とす。代々の日記のあるをば重として日月を送る。

去る程に元亨外一称宜常良上洛の時太神宮の御事を重々御勅問あり。時に常良細々にこれを奏す。天子御感ありて二巻の巻物を文殿より取り出され、是は太神宮の御事とてあれどもその子細を知らず。汝弁じ申すべしと云々。時に常良これを賜り拝見するに本より戈轉（才幹カ）たる者の間一々指南申す。件の書一巻は絵

図なり。今一卷は此の絵図の注なり。時に常良立ち所に我が太神宮の東西宝殿に散仕する金銀の図に是を思ひ合わせるに、昔の不審晴れ了んぬ。社殿造り五輪たる事並びに神意の本土石の精性にて坐す事を深秘に図繪し置きたる事と知り了んぬ。此の時常良潜かに心中に思ふ。哀れ此の図を申し賜て写さばやと思ひて奏し申す。我が所持の文濫脱し候。然るべきは下し給ひて校合仕らんと申す。時に一両日程罷り預かりて夜を以て日を継ぎ両巻を書写して持ち下る。太神宮の重宝是に勝たることあるべからず。存して家の重宝とす。

ここに見える「常良」とは、外宮一称宜檜垣（度会）常良のことである。彼はのち、後醍醐帝によつて異例の従三位に叙せられ、皇子達の名を避けて常昌と改名するが、小稿では常良で統一しておく。この常良上洛のことは、『尚重解除抄』<sup>(21)</sup>にも「元亨元年（一一三二）辛酉三月二十四日、仙洞に進るの時、此の目安を進入す。宰相中将忠光殿を以て内裏より一本進るべきの由、仰せ下さるるの間、同じくこれを書き進る」と見えている。これは前年外宮高宮に盜賊が入った事件の説明のため上洛したもので、その際常良は後宇多院に神宮の祓に関する秘書を献納し、その後醍醐帝にも同様の書を献じたとされる。『鼻婦書』に記されるのはその折りのやりとりであると思われる。それによれば、天子の神宮に関する質問に縷々答えたところ、天子は「手元に神宮のことについて書いてあると思われる本があるのだが、よくわからないので見ておくれ」と、二巻の巻物を出してきた。見ると絵図とその注釈であった。常良はそれを見て、東西の宝殿にある金銀の図と符合することにハッと氣付き、社殿の秘密について記したものであると思ひ當った。そこで「自分の手元にあるものと校合したい」と口実を付けて借り出し、徹夜で写しとつて持ち帰り、以後家宝にした、ということになる。本文はこの後続いて、世義寺の治部律師がこの図の一部を夢中に感得して常良に示したため、驚いた常良が律師に伝授したこと。さらに『鼻婦書』の作者に擬せられる智円が、治部律師に頼み込んで伝授をうけたことを記す。

もしこの話をそのまま信ずるならば、『理趣摩訶衍』中巻にあたる絵図の巻物が、独立した形で存在していたことになり、常良が借用して書写するまでこの書は少なくとも伊勢にはなかったことになる。常良が持ち帰った

元亨元年から『鼻婦書』が成立したとされる正中元年までは三年、正中三年から『天照太神口決』の奥書に見える嘉暦二年までも三年である。この間のこれら神道書の関係をどう考えるべきなのであろうか。それを知る手がかりは、この檜垣常良という人物にあるように思われる。

## 五 檜垣常良をめぐる人々

檜垣常良は弘長三年（一二六三）<sup>(22)</sup>豊受大神宮一祢宜貞尚の子として生まれ、ほぼ順調に加階して正和五年（一一三六）一祢宜（長官）に昇進、暦応二年（一一三九）二十四年の長きにわたって勤めた長官職を辞して亡くなっている。永仁五年（一二九七）豊受皇太神に「皇」の字を用いることの是非が内外両宮の間で論争となった際記録文書『皇字沙汰文』の編者として、また後醍醐帝の中宮廉子の求めに応じて『大神宮両宮之御事』<sup>(23)</sup>を撰進したことで知られるほか、慈遍と交流があり、『旧事本紀玄義』の撰進に力を貸したことでも知られている。しかし従来、外宮長官としては先輩にあたる度会行忠、同じく後輩にあたる度会家行の活躍の間に挟まれて、やや影の薄い存在であつたことは否めない。が、その死去の際、高宮へ登る坂の途中から飛び上がり、空中を歩むように昇天したと言ひ伝えられるなど、行忠・家行にはない伝説を身に纏つた人物であることは注目される。この高宮への坂にまつわる様々な伝承については、いずれ稿を改めて述べたいと思う。

さて、この常良をめぐるのは、たいへん興味深い物語がいくつがある。まず、江戸中期に成立した『勢州繙素往生驗記』<sup>(24)</sup>は常良について次のように記している。

神都常昌、始名常良。太廟神官、嘗て祭酒となる。元徳二年庚午従三位に叙せらる。葷腥を食らはず、終日礼仏誦經し、手に念珠を持し仏名を課す。暇日親から仏像を彫刻し、尤も其の妙を得たり。俗喚びて伊勢の安阿弥という。また私に鎮火の符を施す。然らば同僚相共にこれを嫉みて曰く。「かれ何ぞ仏法に眩惑せん。

日用所行全く浮屠と同じ。」「へ中略」常昌大息して曰く。「嗚呼吾神明の教を設くるや、正直を道となし、仁愛を本となす。是れ即ち釈氏の所謂平等慈悲なるものなり。名は異なれども義は同じなり。然るに愚俗徒に人我をもつて門牆を競峻して、己れと異なる者を惡む。嗟我逝かん」と。

近世の往生伝の述べるところであり、これをこのまま鵜呑みにするわけにはいかない。が、慈遍や治部律師らとの交流を考えると、阿弥号云々はともかくも、その仏教への傾倒ぶりはある程度真実を物語っているのではないかと気がするのである。当時伊勢神官の仏法帰依は、賞賛されるべきことではないにしても、けつして珍しいことではなかったと思われる。第二節で挙げた貞和四年（一三四八）写の『類聚神祇本源』を書写したのは、権祢宜度会実相なる人物であるが、彼は貞治五年（一三六七）に神道五部書のひとつである『伊勢二所皇太神御鎮座伝記』を書写した際の奥書に、「沙弥曉帰〔俗名度会神主実相〕還俗図書助通俊」と署名している。もちろん祢宜と権祢宜とはその禁戒の程度も異なるが、個人的な信仰としてはかなりの範囲認められていたのではなからうか。ただ常良の場合、外宮長官の地位まで昇り詰めたがために、その個人的信仰が指弾されることとなったのではなからうか。

二番目の資料は、『大神宮御相伝袈裟記』<sup>(25)</sup>なる書である。この書は、永徳二年（一三八二）外宮宝殿に秘藏されていた法燈国師心地覚心献納の袈裟を、外宮四祢宜度会貞昌が大神の夢告を受けて、東福寺僧別峯大殊に付与した顛末を語るものである。その東福寺蔵の原本の末尾には、度会貞昌による『由良開山心地聖人御袈裟相伝次第』なる文が付されている。短いもので全文を引く。

檜垣大長官貞尚より、正応二年（一二八九）八月三日、曾祖父常昌これを相伝す。

三位長官常昌より、建武四年（一三三七）正月日、祖父貞香これを相伝す。

祖父一祢宜貞香より、貞治二年（一三六三）三月日、親常廉これを相伝す。

親一祢宜常廉より、応安三年（一三七〇）五月日、祢宜貞昌これを相伝す。

右此れ袈裟は由良心地聖人太神宮御参宮の時、先祖貞尚相伝たるの間、当家無双の重宝なり。しかるに無二信仰の上、奇瑞あるに依りて、蓮台寺長老（別峯）に相伝申さしむる所なり。よつて末代のため手継状件のごとし。

永正十四年（一五一七）の『紀州由良驚峯開山法燈円明国師縁起』<sup>(26)</sup>によれば、渡宋帰朝後無事所願を遂げたことを感謝するために、覚心は伊勢太神宮に参詣して、入宋中天台山の石橋上で天童から授かつた袈裟を奉納しようとした。すると、以下本文によれば、

この時宮中感動の声あり。師竊かに神明の是を得て以て三熱の苦を息めんと欲するを知る。即ち袈裟を以て神殿に納め奉るを要す。是に於いて扉推さざるに自ずから開く。師直に社内に入り神明と対談す。師高声に謂いて曰く。「末世に必ず肉身ノ大士別峯というものの出生して参詣すべし。此の袈裟付与あるべし」言ひ畢りて出ず。よつて神託ありて檜垣大長官貞尚の蔵に納めしむ。

ということがあつて、永徳二年に度会貞昌が夢告を受けることになる。もちろんこの話自体は伝説にすぎないが、重要なのは「法燈国師の袈裟」なるものが、常昌（常良）以降代々「当家無双の重宝」として相伝されてきたという事実である。覚心は永仁六年（一二九八）に卒去しており、貞尚と同時代人と言つてよい。龜山・御宇多両帝の信篤かつた高僧の袈裟を、家宝として伝えんとすることは、常良の仏道帰依の姿勢を物語つてはいないだらうか。

さて三番目の資料は、これも江戸後期のものであるが、『小侯無量寺略縁起』<sup>(27)</sup>なる書である。小侯は宮川をはさんで伊勢と隣接する地である。そこで常良はひとりの僧と不思議な縁によつて出会うのである。本文はやや長いので、要点だけを次に引いておこう。

当寺は常昌長官の本願にして正応五年（一二九二）の再建なり。

其由来を尋ぬるに、南都西大寺覚乗上人十一代「興正菩薩の弟子、後宇多帝の御宇」とて尊き聖人あり。安



濃津「岩田山延命寺」に隠居して、天照太神御本地の尊容を拝せばやと大願をおこし、百度参詣の誓を立て、其の結願の日にいたり、神前に通夜祈念しておはせしに、丑満ころ神殿の内にさもたふとき御声にて勅して曰く。「覚乗汝吾が本地のすがたを拝せんとおもはば、明の曙二見ヶ浦へ来るべし」と。

覚乗が二見ヶ浦に行くと金色の神龍が現われる。が、これは権化であつて内証ではないとさらに祈つたところ、再び声あつて、「我そのかみ仏工と現じ、末世衆生勸善結縁のために仏像を刻み、国府の里太平山無量寺に安置しあり。吾が本地是なり。汝行きてこれを拝せよ」と言われて、無量寺の秘仏にたどりついたのであつた。

茲に常昌長官は実に神道を悟り深く神明に通ぜし人也。彼の覚乗の勸応に仍て神慮を惟るに、国府の里は辺僻にして弘く衆生結縁の便あらず。是に於て彼の三尊を親ら刻み、小俣の里に伽藍を建て太平山無量寺となづけ、安置せしは、参宮の輩拝礼なしやすく、末世の衆生にあまねく結縁なさしむる所も太神の御本願なるがためなり。

同様の話は、鑲善の『神道伝授目録』、南溪詢道の『神仏水波弁』にも載せることを、大山公淳氏が紹介されている。<sup>(28)</sup>この覚乗の事蹟は、『勢陽雜記』<sup>(29)</sup>所収の「岩田山円明寺縁起」にも見える。西大寺の興正菩薩叡尊が文永・弘安年間に、三度にわたり大規模な伊勢参詣を行なったことは、夙に有名であり、その時の文書を納める「大神宮御正体厨子」<sup>(30)</sup>は『理趣摩訶衍』の世界の具現と言えなくもない。その叡尊が参詣後西大寺に還ろうとすると、<sup>(31)</sup>「太神夢中に正公に告げて曰く、汝弟子一人を我が氏寺に留めて戒法を護持せしめんと欲す」と夢告があり、<sup>(32)</sup>「靈夢を蒙り辞する所なし。故に終に覚乗大徳を留」めたという。覚乗という人物については、叡尊付法の弟子であるという以外、実はあまりよくわかっていない。久保田収氏は、三輪流の神道相承次第の類を比較検討されて、覚乗を三輪流神道の大成者に擬せられているが、その具体的な事蹟は明確ではない。ただ、これと同じ覚乗という名が前出『天照太神口決』の巻末にも見えていることを、久保田氏や阿部泰郎氏がすでに指摘されている。その部分を、挙げてみよう。

能々此の重々の口決を始終本末料簡し合わせば、頭密諸教何の疑いかあらん。智円権律師自心を貴く思ひ奉るに依りて、大師の御罰を顧みず、参宮の次でに此れを覚乗に授く。定めて大神に結縁して、神慮に相叶ひ給ふ人ならん。

すなわち、この天照太神に関する口決が、伊勢において智円から覚乗へと伝授されたことを物語るのであるが、筆者はこの覚乗こそが『天照太神口決』の筆者に他ならないと思うのである。それは、高野山大学図書館蔵三宝山寄託の『天照太神口決』の一本に次のような奥書があることによる。

イ本云 嘉暦二年（一二二七）三月五日 覚乗記之 已上

口決智円律師口筆所任置、敢不交私言名也云々

つまり本書は智円より伝授を受けた覚乗が書き留めたものであり、「神慮に叶う人」とは智円その人をさしているのである。このように考えてくると、かの『理趣摩訶衍』中巻の絵図は、常良——治部律師——智円——覚乗という順に伝授され、『天照太神口決』に「差図の口決」として収まったのではないかと思われるのである。さらに敢えて誤謬を恐れずに言うならば、もと上下二巻であった『理趣摩訶衍』に絵図の巻を中巻として差し挟んだのは、檜垣常良だったのではなからうか。むろん、史料的な裏付けが充分とはいえないので、あくまで仮説に止まらざるをえないが、常良をめぐる物語とそこに登場する人々をみると、そうした考えもけつして突飛ではないという気がするのである。

さて、本節の最後にもうひとつ常良にまつわる話を書いておきたい。伊勢両宮には、他社ではけつして用いられない「一切成就祓」なるものがある。近世には一遍唱えれば十遍分の功德があるとして重視されていた。谷省吾氏の研究<sup>(33)</sup>によると、「極汚濁事毛滞留無者汚者不在内外玉垣清浄止申須」というのが、近世以降用いられた形であるが、室町期には「謹請再拝再拝 煩惱無塵煩惱不在内外玉垣清浄申」という形であった。また、同じく中世成立の祓詞に、谷氏が中臣祓の両部神道版と言われる「中臣祓天神祝詞」なるものがある。その内容を見ると、

「杵尊大王の天寿詞の太祝言は、すなわち破伽梵の言、天王の神呪なり。いはく祓はこれ拂ふなりと。その三摩耶形を名づけて大麻とこれを名づけ、手向けしてここに持金剛杵を表す。へ中略へ当に知るべし一切法は自性清浄なりと。故に本来清浄の大神呪をもつて、すなわち菩提の道場に到り、無上の正覺を頓証す」などとあり、「掲諦掲諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶 白衆等各念 此時清浄偈 諸法如影像 清浄無假穢 取説不可得 皆從因業生 不可得不可得 諸法不可得」と結ばれる。これらの祓詞は、神宮文庫蔵『御祓本』の中に収められているが、その該当部分の本奥書には、「本に云はく、此の日記は常昌卿書き置かるなり。時に明徳四年（一一三九）癸酉八月二十七日書写し畢んぬ。権祢宜匡興」とある。つまり、この祓詞は常良が書き記して置いたものだといふのである。そこで改めてこの祓詞を見ると、そこに説かれている理念が炙りだされるように浮かび上がってくる。それはすなわち、一切諸法は自性清浄であるがゆえに、内外両宮の玉垣の内もまた清浄である。そのことが凝集されたこの本来清浄の祓詞を唱えれば、いかなる煩惱も留まることなく消え去つて、一切の願いは成就することではないだろうか。これは、まさに小稿前半で見てきた『理趣摩訶衍』の教説そのものであり、「一切成就祓」の持つはたらきは「十七言の真言」と少しも異ならないのである。ほぼ間違いなく常良は『理趣摩訶衍』に目を通しており、その理解したところを自作の祓詞に注ぎ込んだのではないかと思われるのである。

## 六 むすび — 両部神道成立論への視座

以上、小稿では、前半で『両宮本誓理趣摩訶衍』なる中世神道論書の読解を試み、後半で『理趣摩訶衍』をとまりまく他の神道書とそれを生み出した人々に考察をめぐらせてみた。結局『理趣摩訶衍』自体の成立と作者については、明らかにしえなかつたわけであるが、実は当初から筆者の目論みはそこにはなく、この『理趣摩訶衍』

なる書を定点として据えることによって、一連の神道書の位置付けをある程度明確にすることができるとはなにかという点にあつた。いわゆる「両部神道」系とされる神道論書の成立事情には、様々な流派の人々が入り込んできていて、そのもつれた糸を解きほぐすことが急務であると思われるからである。しかし今回はその結び目のひとつに挑んだに過ぎず、問題とすべき神道論書は『鼻帰書』や『天照太神口決』をはじめ、『日諱貴本紀』『高庫蔵等秘抄』『神性東通記』『石窟本縁記』等々数多い。それらにも、今後取り組んでゆかねばならない。小稿で筆者の目論みがどの程度成功しているかはわからないが、その過程でひとつ気が付いたことがある。それを述べて結びに代えたい。

小稿に登場した人々、檜垣常良・智円・叡尊・覚乗・心地覚心といった人々を並べると、そのいずれもがある人物と深い関わりを持つていることに気付く。外宮神官・南都僧・禪僧と一見ばらばらに見える人々の輪の中心にいるのは、大覚寺法皇御宇多院である。常良が上洛して御宇多院に神宮の祓についての諸本を献上したことはすでに述べた。叡尊は元寇の際、異国降伏の祈禱の靈驗にお覚えめでたく、弘安九年（一二八六）八月には、後宇多帝に菩薩戒宗要を講談、八齋戒を授けたことが『勘仲記』<sup>(34)</sup>に見えている。また心地覚心も後宇多帝の信篤く、弘安四年（一二八一）には帝に禅要を進講し、衣盂戒法を授けたことが『円明国師行実年譜』<sup>(35)</sup>に載せられている。さらに小稿では取り上げなかったが、帝の受戒灌頂の師となつた醍醐寺の道順も、『天照太神口決』に伝授者としてその名が見えている。

従来これらの神道書は、むしろ後醍醐帝と結び付けられることが多かった。たとえば久保田収氏は『鼻帰書』を文観の徒の作として、立川流と結び付けられようとした。<sup>(36)</sup>その論考の中で、はしなくも久保田氏が『鼻帰書』中の、「大覚寺殿の御子帥宮を位に即け奉らんと関東へ仰せ下さる」という文を引かれて、後醍醐帝と世良親王とされたのは、まさしくそうした姿勢の現れであろう。しかし、『神皇正統記』『増鏡』などを見れば、大覚寺殿が後宇多院であり、帥宮が尊治親王すなわち後醍醐帝であることは自明である。筆者は小稿の『理趣摩訶衍』

をめぐる考察を通して、これらの神道書が、後醍醐帝——文観という単純なラインではなくて、後宇多院のもとに出入りする、様々な宗教的立場の人々の知的交流の場から醸成されていったのではないか、という見通しを持つていのである。具体的な場所としてそういうものがあつたかどうかは別にして、「御宇多院のサロン」とでもいうべきものを想定してよいのではないかという気がしているのである。それが正しいかどうかの答えは、これら一連の神道書や伝授の類を順次解説分析してゆくことによつてしか得られないであろう。自らの今後の課題としたい。

# 註

- (1) 大山公淳「弘法大師の神道」(『神仏交渉史』一九四四)
- (2) 久保田収「『鼻掃書』について」(『神道史の研究』一九七三)
- (3) 福田亮成「空海仮託の神祇書」(『日本仏教学会年報』五〇、一九八五)
- (4) 『國書総目録』には、大正大学にも一本が所蔵されている旨、記載がある。筆者が調査に訪れた際、同図書館の方が懇切に搜してくださつたが、欠本リストにも載せられていないとのことで、現在所蔵されていないことはもちろん、かつて所蔵されていたかどうか不明ということであつた。
- (5) 榎田良洪「神道思想の受容」(『真言密教成立過程の研究』一九六四)
- (6) 久保田収「伊勢神道の形成」(『中世神道の研究』一九五九)
- (7) 岡田荘司「両部神道の成立期」(『安津素彦先生記念神道思想史論集』)
- (8) 「神道と書目録」(『密教研究』三五、)
- (9) 内閣文庫蔵、その他『無題記』の名で大倉精神文化研究所に、『四重秘釈』の名で島原市立図書館松平文庫等に所蔵されるものも、これと同系統の本である。
- (10) 大神宮叢書『度会神道大成 前編』所収。

- (11) 『大正蔵』8、七八四a。なお、『理趣経』については、宮坂宥勝『密教経典』（筑摩書房）「仏教経典選」8、一九八六）、那須政隆『理趣経達意』（一九六四）、福田亮成『理趣経の研究』（一九八七）、八田幸雄『秘密経典 理趣経』（一九八二）等を参考にした。
- (12) 『大正蔵』19、六〇七a。
- (13) 『大正蔵』20、五七三b。
- (14) 『大正蔵』7、九八六a。
- (15) 『大正蔵』18、三三七a。
- (16) 蘇悉地の印については、三崎良周「東密における蘇悉地」（『台密の研究』一九八八）を参考にした。同書でも指摘されているように、ここには東密小野流の影響が窺える。小稿との関係で言えば、後出『天照太神口決』には醍醐三宝院流伝授の影響が濃密である。醍醐三宝院をめぐる神道説の成立については、いずれ稿を改めて述べてみたい。
- (17) 詳しくは、前掲（2）参照。
- (18) 『天照太神口決』の伝本はかなりあるが、ここでは原則として高野山大学図書館所蔵『無題記』および国文学研究資料館所蔵『天照太神両宮秘決』を参照した。
- (19) 伊藤正義「慈童説話考」（『国語国文』五五四、一九八〇）および、阿部泰郎「『入鹿』の成立」（『芸能史研究』六九、一九八〇）
- (20) 『理趣摩訶衍』の絵図と『鼻掃書』、『天照太神口決』の記述の具体的な対応については、山本ひろ子「神宮の象徴図像学」（『春秋』三三三、一九九一）に、対照表付きで詳しく述べられている。また小稿では扱わなかったが、やはり同系の神道書である『日誦貴本紀』には、「理趣摩訶衍中巻の図」として同様の絵図を載せる。早稲田大学副手の伊藤聡氏によれば、同書も南北朝期の成立と思われることである。
- (21) 明応六年（一四九七）成立。『大藏同註釈大成』上に所収。

- (22) 檜垣常良の事蹟については、主に『建武中興と神宮祠官の勤王』（一九三七）を参考にした。
- (23) 慈遍の神道については、菅原信海『山王神道の研究』（一九九二）および、神道体系『天台神道』上の解題を参照。
- (24) 天命六年（一七八六）刊。引用は前掲（22）によった。
- (25) 『群書類従』二十四。奥書については『群書解題』に載せる。なお、心地覚心については、白石芳瑠『法燈国師について』（『日本学士院紀要』六一、一九四六）、荻須純道『法燈国師について』（『竜谷史壇』四八、一九六一）等を参考にした。
- (26) 早稲田大学図書館教林文庫所蔵。この縁起は、弘安三年（一二八〇）覚心生前に弟子の覚勇が記したものをもとに、応永三十一年（一四二四）に増補改訂がなされ、さらに永正十四年（一五一七）徳種有隣が漢訳したものである。
- (27) 文化十二年（一八一五）成立。引用は前掲（22）によった。
- (28) 大山公淳『鎌倉時代神仏道』（『神仏交渉史』一九四四）
- (29) 『勢陽雜記』（三重県郷土資料叢書十三、一九六八）
- (30) 昨一九九一年、東京国立博物館等で開催された「奈良西大寺展」に出品されたのは記憶に新しい。論文としては、榎田良洪前掲書（5）、村山修一「神仏習合の歴史的素地と三輪流神道の形成」（『習合思想史論考』一九八七）などがある。
- (31) 久保田収前掲書、（2）参照。
- (32) 阿部泰郎前掲論文、（19）参照。
- (33) 谷省吾「一切成就社の本文と伝来」（『皇学館大学史料編纂所報』六三・六四合併、一九八三）
- (34) 『増補史料大成』35
- (35) 『続群書類従』巻二二七。
- (36) 久保田収前掲書、（2）参照。

〈付記〉

本稿を書くにあたって、史料の閲覧を快く許してくださった大倉精神文化研究所・高野山大学図書館・国文学研究資料館・神宮文庫・玉川大学図書館・天理大学天理図書館の各機関、および高野山での史料調査にご助力くださった高野山大学の岩崎日出男講師に深く感謝申し上げます。

なお、小稿の論考は、伊藤聡・中田徹・牧野和夫・渡辺匡一各氏と続けている研究会「中世神道書を読む会」における研究成果を土台にしている。共同研究の性格上、論考中に一々挙げることをしなかったが、四氏には改めて謝意を表したいと思う。

ちなみに、同研究会では、現在『天照太神口決』の校注と『神代秘決』の翻刻を準備中であり、今後の中世神道に意欲的に取り組んでゆくつもりである。

(一九九二年五月五日 稿)